

園の輪

久米利男学院長
追悼号

学校法人 甲子園学院



CONTENTS

追悼 久米利男学院長	2	思い出のアルバム	6
追悼式	4	追悼メッセージ	8

追悼 久米利男学院長先生



一月十四日、甲子園学院本部において、旧臘十七日に逝去された久米利男学院長先生を追悼する「記帳・献花の集い」が執り行われました。甲子園学院の在校生、在校生の保護者、卒業生、現職員、旧職員、教育関係者、一般の方々等、七〇〇名を超える方々が参加され、追悼の記帳・献花を行いました。会場には、在りし日の久米利男学院長先生の写真を展示するコーナーも設けられ、多くの方が生前の学院長先生との思い出に触れることができました。

方々等、七〇〇名を超える方々が参加され、追悼の記帳・献花を行いました。会場には、在りし日の久米利男学院長先生の写真を展示するコーナーも設けられ、多くの方が生前の学院長先生との思い出に触れることができました。





在りし日の
久米利男学院長先生
写真展

式 悼 追 忌 回 63 校 祖

平成二十八年三月三日午前十時から体育館において、第六十三回忌追悼式が厳粛に挙行されました。祭壇には、校祖先生と昨年十二月に亡くなられた久米利男前学院長のご零位とご遺影の前に供花・お供えが捧げられ、来賓・旧職員・卒業者や教職員並びに各字校園の園児・児童・生徒全員が参列して献花しました。



追悼の辞

今日三月三日は校祖 久米長八先生のご遺徳を偲び、また先に物故された学院関係者の御霊を祀り先人を顕彰する、学院にとって最も大切な追悼の日であります。

そして今年、久米利男学院長合祀という深い悲しみの中で追悼式を迎えました。

校祖先生の衣鉢を継ぎ、六十二年間の長きにわたり学院長の重責にあった久米利男学院長が昨年十二月十七日に永眠いたしました。昭和二十九年に校祖先生の急逝で累卵の危うきにあった学院を三十六才の若さで引き継ぎました。極めて厳しい状況の中、校祖先生



に勝るとも劣らない的確な判断力、稀に見る先見の明、果敢な行動力を發揮し、そして何より甲子園学院への限らない愛情を以て現特別顧問と二人三脚で幾多の難局を切り拓き、校祖先生から受け継いだ学院を県下唯一の総合学園に育て上げました。私は長く側で仕え、間近に八面六臂の活躍を目の当たりにして参りましたが、教育に対する情熱、経営に対する熱意はまさに鬼気迫るものがあり、文字通り全身全霊で教育・経営に打ち込んでいる姿勢には敬服以外の言葉が見つかりません。

また学院長はその清廉潔白な性格から贅沢を好まず、華美を嫌い、ひたすら学院教育の神髄を追求して参りました。生前にも、度々叙勲のお話を頂きましたが「私の勲章は卒業生である」と固辞し続け、ついぞその栄に浴することはありませんでした。その人柄を慕い去る一月十四日に行われた「記帳・献花の集い」には旧職員、卒業生

はもとより多方面から七〇〇名を超える方々が遺徳を偲び、花を手向けて別れを告げて下さいました。ご参集頂いた皆様にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。

さて「守成は創業より難し」と申します。創業された校祖先生の偉大さはいくらでもありませんが、学院長は守成どころか、更に学院を大きく飛躍させるという偉業を成し遂げたことは天上の校祖先生が一番良くご存じのことと思います。

常に全力で駆け抜けた九十九年の生涯でしたが、ようやく長い旅路を終え、今、学院長は校祖先生の御許に参ります。校祖先生、何卒学院長に「よくやってくれた、よく頑張った」とお褒めの言葉を賜りとう存じます。そしてお二人で思う存分学院の思い出話などなさって下さい。また先に物故された教職員や、学生、生徒、児童との再会も喜んで下さい。

現在、私学を取り巻く環境は大変厳しく、特に今年は大学・短大の認証評価受審という学院の浮沈に関わる一大試験が待ち受けております。この時期に学院長を失ったことは痛恨の極みであります。私は学院長の遺志を継ぎ、和衷協同の精神で教職員とともにこの逆境を跳ね返す覚悟であります。またこれからは校祖先生だけでなく、学院長の御霊の力も頂くことになります。

その意味で逆に意を強くして今後の学院運営に臨めるものと思っております。学院長が、最後に学院に参りましたが、のは昨年の十一月二十五日でしたが、

本人の強い希望で五ヶ月ぶりに学院長室に入りました。同行する私に「向こうに行け」と申しました。その意味が分からず問うたところ「隣の執務室で仕事をしろ」と言いました。私はこの言葉を私の遺言であったと理解しております。校祖先生も生前「私は死ぬ瞬間まで働くから見ておれ」と言われました。この二つの言葉は強く結びついています。さすがは校祖先生の薫陶を享けられた学院長の言葉だったと今更ながら感じ入っております。最後の最後まで学院のことをひたすら気にかける、自分に構わず学校の仕事をやるように命じた学院長の言葉は教職員全員が重く受け止めなければなりません。

この気概をもつて事に処すれば必ず学院は発展いたします。それを信じて学院に関わる者一同で力を合わせ頑張ってください。徒らに学院長を懐かしむだけではなく、そのご遺訓、ご遺徳を如何にこれからの学院の発展に役立てていくか、そしてそれを実行していくことこそが、久米利男学院長への最大の供養になると考えています。

在天の校祖先生、学院長先生、そして物故されし幾多の御霊に対し一層のご加護をお願いするとともに、学院発展の為、更なる努力精進を続けますことを改めてここにお誓いして謹んで追悼の辞といたします。

平成二十八年三月三日

学校法人甲子園学院

理事長 久米知子
学院長

追悼メッセージ

学院長先生のご霊前に教職員を代表し、謹んでお別れのご挨拶を申し上げます。

「学院長先生 学院長先生 よう頑張られましたね。本当によく頑張られました。」先生が病院でお亡くなりになり、お家に帰られて対面させていただいたときに、思わず最初に大きな声で語りかけたのはこの言葉でした。と申しますのも先生は昨年七月三日のお誕生日を目前にして、残念なことに受傷され、当日予定しておりました「白寿お祝いの会」を延期し、そのまゝ入院となつたのであります。それ以来何度もお家に帰りたいとの希望でしたが、それも叶わず約六か月ぶりのご自宅帰還でした。まさにやつとご自分の家に帰れた、という強い願いが成就した安堵のお気持ちと、そこから滲み出る安らかで穏やかな顔を拝見出来ましたからこそ、先ほどの言葉で声掛けさせていただいたのであります。

先生は大正六年七月三日ご誕生、同志社大学法学部ご卒業、昭和十七年陸軍入隊後昭和二十二年招集解除になるまでの五年間、兵役では筆舌につくせぬご苦勞をされました。お聞きしたところによりますと、いわゆるビルマ戦線では壮絶な戦いを余儀なくされ、壊滅的打撃のなか九死に一生を得て、ようやく本土の土を踏まれたとのことでした。

いもかけないことが起こり、学院長ご就任となつたのであります。爾来六十二年間に及ぶ学院長としての重責と、また昭和三十六年からは理事長として十一年前に知子現理事長に、その職位をお譲りになるまで四十四年間にわたり、まさに甲子園学院の大黒柱・機関車として、学院発展に粉骨砕身人生の全てを賭けられました。

校祖先生が甲子園学院中学校・同高等学校と、甲子園学院幼稚園・同小学校をお創りになり、基礎固めをされた後、学院長先生は昭和三十九年に甲子園短期大学を、さらに昭和四十二年には宝塚市に甲子園大学を設立され、今日の大学から幼稚園までを擁する、総合学園の姿を実現されたのであります。

当学院に在籍した先輩たちまた現在在籍している学生・生徒・児童・園児たちは、建学の精神「勤勉努力 和衷協同 至誠一貫」の校訓三綱領を常に教育の礎として、有意な人材と成ることをモットーに、日々精進を続けております。これも校祖先生のご意志を引き継がれ、建学の精神の具現化に努められた学院長先生の、実践教育の賜物であります。

私は平成十二年から当学院にお世話になつております。当時学院長先生はすでに八十歳を過ぎておられました。が、非常に教育現場を大事にされる姿勢は常々お変わりありませんでした。今でも鮮明に覚えておりますのは、ご自分で自動車を運転され、宝塚の大学改修工事に立ち合われて、昭和四十二年新築当時の雨樋の通し方まで解説さ

れたのは、建築の専門家も脱帽せざるを得ませんでした。ただそれだけでなく、短大イネーブルガーデンの整備工事や、幼稚園の新築工事等現場での仕事は、こまごまとしたところまで丁寧に表示されておりました。ご自身は建築や土木に関する教育をお受けになったとは、ついぞ聞かされたことはありません。

また平成七年一月十七日、学院長先生をして「痛恨の極み」とまで言われた、未曾有の大震災に見舞われました。大学から幼稚園までの建物、施設、備品に大きな被害を受け、不幸にして大学教授が一名お亡くなりになりましたが、五千余名の学生生徒達は無事でありました。学院長はこの大震災にも毅然として、しかも即座に対応をされました。「長期的視野に立ち、学生、生徒に対して安全で快適な教育環境を整備することが肝要である。」と中等学校北館校舎・短大実習ハウスは直ちに取り壊され、二年四か月後の平成九年五月には現校舎・生活実習ハウスとして完全復旧されたのであります。

最後に先生ほど学院生を大事にさ



れ、愛された方はいらつしやらないのではないのでしょうか。その証左は先ほどの震災復旧もさることながら、先生ほど永く教育に携わってこられた方は、兵庫県にしても国にしても、功労賞的表彰をお勧めするのは当然であります。しかし先生は「自分の宝物は学院の学生や生徒たちである。」と一切お受けにならなかったものであります。このことこそまさしく「久米イズム」の真骨頂でありましょう。私たちは先生の教えを教えとして生かし、今後のさらなる学院の発展を目指して、邁進してまいりますことをお誓い申し上げます。どうか先生の御霊の安らからんことを衷心よりご祈念申し上げます。お別れのご挨拶といたします。

平成二十八年三月三日

教職員代表

法人事務局長 福井 昇

ありし日の久米利男学院長先生を偲んで



甲子園学院教養大学講座 運営委員会



短大の学生寮建築現場



甲子園学院美術資料館開館（平成13年）



新幼稚園舎竣工記念式（平成15年）



思い出のアルバム



「必勝」ハチマキで見事優勝！



慰霊塔開眼法要



学院長先生 略年譜	
大正 6 年(1917)	7月3日 香川県丸亀市に生まれる
昭和16年(1941)	甲子園高等女学校開校(校祖 久米長八)
昭和22年(1947)	9月復員、甲子園高等女学校教諭
昭和23年(1948)	学制改革で学校法人甲子園学院となる 甲子園学院高等学校、同中学校と校名変更
昭和25年(1950)	1月 石川多香子と結婚
昭和26年(1951)	校祖とともに幼稚園、小学校を開園・開校
昭和29年(1954)	3月3日 校祖急逝により第2代学院長に就任 甲子園学院高等学校長・中学校長・小学校長 幼稚園長を兼任(平成4年3月まで)
昭和36年(1961)	理事長に就任

昭和39年(1964)	甲子園短期大学開学
昭和42年(1967)	甲子園大学開学
昭和62年(1987)	校祖生誕100年記念式典挙行
昭和63年(1988)	学院物故者慰霊塔(高野山)建立
平成 3 年(1991)	学院創立50周年記念式典挙行
平成 7 年(1995)	阪神・淡路大震災被災
平成 9 年(1998)	中・高等学校新校舎完成
平成17年(2005)	理事長退任 久米知子理事長就任
平成18年(2006)	中山医学大学から名誉理学博士号を受ける
平成23年(2011)	学院創立70周年
平成27年(2015)	12月17日逝去

追悼メッセージ



卒業生を代表して久米利男学院長先生のご霊前に謹んでお別れの言葉を申し上げます。

私は甲子園学院高等学校、甲子園大学で学び、卒業後は事務職員として学院に奉職し長年にわたりご指導を頂いておりました。昨年十月白寿の会で先生にお声をかけて頂いた上に記念写真まで一緒に撮らせて頂きましたのに、まさかあれからわずか二月でお亡くなりになるなど今でも信じられません。

もう四十年前にもなりますが、甲子園短大事務局におりました時、病気で余命いくばくもない父のことを心配して下さり、「今は夏休みで学生もいないからこの間にしっかり看病してあげなさい」とお声をかけて頂いたこと、本当にうれしく今もその時のことを思い出すと先生への感謝の気持ちでいっぱいになります。

一方で先生はとても仕事には厳しい方でもいらつしました。短大で日

本文文化科が出来た年のお正月明けにのんびり出勤すると「卒業生の君が真剣に募集活動しないで誰がする。正月明けから玄関を開けて見学に来られた方をご案内することが大事なんだよ」とご注意を頂きました。

私はたくさん叱られて来ましたが今思い返すと本当はとても優しい先生だったと思います。学院長先生から頂いた優しいお言葉、お叱りのお言葉、その一つ一つが私の宝物です。学院長先生がおられない今、もう一度先生とお話したい、お会いしたいと、それが叶わないことは分かっていますが本当に心からそう思います。

私たちは学院長先生のことを一生忘れません。これからも天国から私たちを見守っていて下さい。ご冥福を心より祈っております。今まで本当に有り難うございました。そして安らかに休息下さい。心から感謝の気持ちを込めて弔辞とさせていただきます。

平成二十八年三月三日

卒業生代表 梶川 裕美



園の輪

久米利男学院長
追悼号

平成28年3月17日発行

学校法人 甲子園学院

〒663-8107 西宮市瓦林町4番25号

TEL. 0798(67)2100

FAX. 0798(67)5488

<http://www.koshien.ac.jp/honbu/>

◆甲子園学院の発展に生涯にわたり尽力された久米利男学院長のご冥福をお祈り申し上げますとともに、「記帳・献花の集い」「校祖六十三回忌追悼式」「思い出のアルバム」について特集した追悼号を発行しました。

◆追悼式にはご欠席でしたが、久米多香子特別顧問は当日の早朝に学院長を偲び献花されました。

あとがき

